

魚紋

吉川英治

青空文庫

お部屋様へやさまくずれ

一

今夜も又、この顔合せでは、例によつて、夜明かしとなること
間違まちがい無しである。

更ふけても、火鉢に炭をつぐ世話もいらぬ程の陽気だし、桜花はな
も今夜あたりでおしまいだらう、櫛れんじ子の外には、まだ戸を閉たてな
い頃から、春雨の音がしとしとと降りつづいていた。

パチ…… パチリ

櫃かやの柾目まさめの盤ばんが三面、行儀よく並ならんでいた。床の間へ寄つた一面は空いていて、紫ちりめんの座ぶとんだだけがある。那智石なちいしの白へ手を突つ込んで、

『さアて。……』

弱つた顔つきを、近視のように盤へ近づけてうなっているのは、ついでこの近所の山岡屋という、質屋の番頭。

質屋というと、堅気かたぎの中でもかちかちの吝嗇屋しまりやらしく聞えるが、専らもっぱ商売になつてゆくのは、盗品けいずかい買だといううわさのある質屋なのである。で、その番頭という才助さいすけの眼もどこか鋭かつた。けれど、男ぶりはちよつと好くて、年頃も、ここへ集まる中では

一番若い二十四か五ぐらい。

パチ？

『なる程。妙みょうしゆ手もあるものだの』

相手は医者いしやの玄庵げんあんだった。

外科げかでは上手と云われているが、脂ぎった五十男で、仁術じんじゆつ

という職業には余りに体力的な人物だった。道楽が多いらしいのである。いつも高利を借りて苦しんでいる。第一病家を廻まわつてい
る時間よりも、この碁会所碁会所にいるほうが遙はるかに多いという医者様
だった。

『濟まないが、今度はもらつたぜ』

一局、勝敗がついたとみえ、盤の下にかくしてある賭金かけがねを、攫さらうように懐中ふところへしまいこんで、

『——何うどだな、其そち方の風雲は』

云いながら、隣りの対局へ、横から顔をつき出したのは、横よこびに黒い刀傷かたなきずのある村安伝九郎むらやすでん ろうである。

これは御家人と自称している男で、三十がらみの苦みばしつた骨柄であつた。背が高く、手脚が長くそして、痩せているので、岡場所などを通ると売女おんなたちが、

(蠶螂かまきりさん——)

と綽名あだなして呼ぶ。

その蠅螂さんと対局して、今、賭けておいた幾らかの金を取られ、悄しよんぼりと、もう石を崩くずした盤を、いつ迄、未練げに眺めていたのは、浮世絵師の喜多川春作きたがわしゆんさくだった。

気が弱くて、闘志がなく、おまけに碁はカラ下手と来ている春作は、よせばいいのに、毎晩ここへ来なければ寝られないと云っている、来れば又、必ず鴨かもなのだ。

(何の因果か)

と、自分でもこぼして居ながら、今夜もいつ迄、帰ろうとはしない。

もう更けているので、よく流行はやるこの碁会所も、帰る者は帰っ

てしまったのであろう、座敷に居て、夜も知らないのは、こう四名だった。

後は——この碁会所あるじの主が一人。

今し方、夜食の鮓すしが台所へ入ったから、茶を入れる支度をしているのであろう、茶の間のほうで瀬戸物の音がしている。

『かまきりさん』

そこから声がして、

『もう、お鮓を出してもよござんすか』

伝九郎は舌打ちして、

『よしてくれ、かまきりなんて呼ぶなあ。——悪党じゃあるめえし』

『ホホホホ。だって、呼ぶ人がきれいな女だと、振向くじやないの』

『からかうのか、師匠』

『よそう、おまえさんが怒ると、ちよつと^{すじ}凄^{すじ}いからね。——お鮎は』

『まだ、山岡屋と玄庵の勝負が片づかねえから、もすこしの間、そつちへ置いといてくれ』

『だいぶ^{おおいくさ}大^{おおいくさ}戦^{おおいくさ}だとみえますね』

そう云いながら、碁会所の女主人^{あるじ}は、茶の間から出て来た。髪^{かみ}を切下げにしているけれど、年はまだやつと二十四、五にしか見え^{ひふ}ない。いつも被^{ひふ}布^ふを着て崩したことがない。十六の頃からさる

北国の大名のお部屋様として栄華をしつくして来たが、その大名の近習きんじゆの者と恋をして、やがて浮名が立つと、腹を切つた男をすてて、自分ひとりで越後えちごから江戸まで逃げのびて来たという履歴れきを持っていた。

さすがに、琴、茶、花、何でも嗜たしなみがあつて、絵もすこし描くし、わけて碁は生れつきの才分とみえ、大名の奥にいた頃、宗家から女で四段の許しをもらつていた。

（——お可久様かくさま）

近所の者や御用聞きは、みな「様」をつけて呼んでいた。この本所ほんじよの裏町では、彼女の高貴めいた身装みなりだの端麗たんれいな目鼻立ちが、掃溜はきだめの鶴と見えるらしく、妙な尊敬を持つのだつた。

お可久様も又、それを当然として、内輪うちわでこそ砕けているが、
 往来へ出ると頭ずが高かった。

(あの女ひとは元、大名のお部屋様だったのだそうだ)

(道理で、品がある)

(町女には、ああいうのは居ない)

(すごいな)

頭の高いのがよく見えるのだから可笑おかしい。彼女が、今の家に、
 囲碁いご指南しなんのかんばんを掛かけると、かねがね、眼をつけていたのが早
 速に集まった。

ずいぶん贅ぜい沢たくをやつて暮しているが、それは蟻あじのように皆、

甘い男たちが運んで来るらしい。もっとも初めは指南だけであつ

たが、いつの間にか、賭碁かけごが専らになり、そのほうの收益みいりも尠すくなくない。そしてお可久様を張りに来ている連中も、だんだん篩ふるいにかけられて、粘り強い者だけが、今では、碁盤の外の勝敗しのぎに鎬しのぎを削っているのであつた。

浮世絵師の喜多川春作。

山岡屋の番頭才助

御家人のかまきり。

それから外科医の玄庵。

——と、こう四人は、その中でも、毎晩のように詰かけて、碁には負けても、そのほうでは一歩も退ひかない意気を示している徒て輩あであつた。

彼の世からの使

一

『両国鮓りようごくずしかい、白魚しらおの鮓ずしなぎ、ちよつとおつだな』

『師匠、すまないが、茶ちやをも一つ』

次の部屋へ座蒲団ざふとんをうつして、茶卓ちやぶだいを囲みながら、四人は

笑い興じた。

そうしている表面の様子は、囲碁仲間の睦むつまじさの他、何も険悪らしいものは無さそうだが、よく見ると、お可久ひとりめぐを繞めぐつてうごく四人の眸には、かなり複雑なものがある。

『忌いまいま々しいのう、山岡屋さん、おぬしには今月に入ってからもう七、八両がとこ奪さらられているぜ。もう一局行こう』

医者いしやの玄庵は、鮓すしを食べ終ると、早速に又、盤の前へ戻かえつて先に坐りこんでいる。

山岡屋の才助は、落着き払はらつて、

『およしなさいよ。今夜はもう』

『なぜ、なぜ』

『相手を換えて、春作さんと打うつてごらんなさい。どうも、玄庵

さんとやれば、金はただ貰うようなもんだが、あかご嬰兒の手を捻ひねるよ
うで、張はり合あいがない』

『ば、ばかにしなさんな。さア、もう一番』

玄庵が力りきみ返ると、みんな笑った。そして、かまきりの伝九郎
が、

『じゃあ、おれが一手ひとて、御指南しようか』

『ム、幾額いくらい賭く？』

『これだけ』

二分銀を盤の下に置く。玄庵も金を出しかけた。

——すると、お可久が、

『おや？ ……風かしら？』

春作は、気の小さな眼をして、

『風じゃありませんよ。誰か、おもて戸外で戸をたたいているのだ』

『誰だろう、今頃。——婆やは寝かせてしまったし……』

つぶや 呟きながら、お可久は起って行つた。もう玄庵と伝九郎はパチ

パチ石を打ちはじめている。

戸の開く音あがした。その隙間から湿しめっぽい風が奥まで流れこんで来る。お可久は、何か暫く戸口に立って、闇の中の人影ささやと囁いていたが、やがて座敷へ戻って来ると、

『山岡屋さん……』

と、眼で呼んだ。

『え？』

『お前さんに用事の人らしいよ、行つてごらん』

『へえ……はてね？ ……』

お可久に従つて、山岡屋が部屋を出て行くと、碁を打っていた玄庵も、かまきりも、ジロと其の方へ眼をやった。

山岡屋は、暗い格子戸の外を透かして、

『——誰だい？』

と、云つた。

ひさし

廂の雨だれに打たれながら、頬冠ほおかむりをした男が、その上から

又赤合羽あかがっぱを被つて、ぼんやり立っていた。

『あなたが、山岡屋の才助さんで』

『そうだよ』

『今、お店のほうへ参りましたら、この碁会所にいと伺いましたので、やって来ましたわけだ』

『雨が吹ツ込むじゃねえか。用向きは一体何だよ』

『恐れ入りますが、ちよつと、此処ではお話し申し難い事なんで、

——戸外^{そと}まで顔を貸してくれませんか』

『馬鹿を云つちやいけないよ、この降りに出られるものか。ここは心やすい家だから、何も気づかいは要らないぜ』

『でも、何うもその……』

煮え切らない男だった。第一風態を見ても、職業がわからない。屋敷^{やしき}仲間^{ちゆうげん}でもなし、若党^{わかとう}でもなし、凡^{ただ}の町人とも見えないのである。

お可久は、後に立うしろっていたが、

『じゃあ、二階が空いているから、二階で話しては何うですか』
すると、雨の中で、考え込んでいた合羽の男は、

『あ。……そう願えれば』

と、救われたような顔をお可久へ向けた。

二

パチ——と一石せきお布いて、かまきりが、横を向き、

『師匠、今、二階へ上って行ったのは？』

『知らない人さ』

『でも、山岡屋が一緒だろう』

『何か、ないしよばなし内密話があるっていうから、二階を貸してやったま

でさ』

『おんな情婦か』

『や嫉くような筋じゃない。何処の者かしらと思つて、今、その男の脱いで行つた合羽を見たら、裏にてんま伝馬役所と黒印がお捺してあるじゃないか。ホホホホ、伝馬の牢番か何からしいんだよ』

『牢番が。……牢番が何どうして来たのだろう』

と、これは喜多川春作が呟いた。

玄庵の打つた石へ、すぐ白を一石打つて、かまきりも話に口を出した。

『おかしいな？ 伝馬の者が、こんな夜更よふけにこつそり訪ねて来るなんて』

『だって、山岡屋じゃ、内密で盗品けいずかい買かもしているというから、牢屋敷の者にだって、まんざら縁故えんこがないわけじゃないだろうさ』

『町方役まちかたとか、牢役人などが、袖の下を取るおおびのは公らだが——それにしても、牢番なんて下ツ端ぽまでが小費こづかいをせびりに来るのかなあ』

『おおかた、そんな事だろうよ』

お可久は、鮓の皿や汚れ器ものを、台所へ片づけて、風呂に入った。

『——』

かまきりと玄庵の勝負を、春作はつまらなそうに横からのぞい

ていた。いつでも持つて来ただけの金はここで損すつてしまふ春作なのである。これから、火の気もない家へ歸つて、一枚摺ずりの彩いろえ絵や読よみほん本の挿さしえ絵を描く気にもなれないのであろう。倦うんだ顔いろをしながらも、碁を眺めていたけれど、耳は、風呂場の方です。小桶の音を聞いて、湯気の中にお可久のすがたを想像しているのかも知れなかつた。

——と、廁かわやへ立つた歸りに、春作はふと梯子はしごだん段を見上げた。ぼんやりと、上の障子に明りが映っている。

『いやにシンとしているが？』

何か内ないしよ密話らしいと云つたお可久のことばがまだ耳にあつたので、ふとうごいた好奇心だつた。

そつと、ふた段、三段と、あしおと登音をしのばせて、梯子段の途中にじつ凝と立っていた。

三

『ほんとに、おしようつ和尚鉄がそう云つたのか』

『へい』

『いつあげ召捕られたんだ』

『伝馬牢へ下げられたのが、あとげつ後月のようか八日でした』

『すると、お前さんは、その和尚鉄に付いている牢番なんだね』

『夜昼、一日措きに、番代りがありますから、他にまだ二人ほど』

相あいやく役が居りますが、その者たちには何も打明けてはございませ
ん。和尚鉄が、私にだけ話した事なんで』

『ふーむ。……何か証しるしを持って来たかい』

『手紙を持って来ました』

『よく御牢内でそんな物が書けたな』

『それやあ、私が、そつと都合をつけますからね。……今夜は、
私は非番なんで、実は、こつそりお訪ねに上ったわけで』

濡れている着物の懐ふところ中を探つて、牢番の男は、一通の手紙を
さし出した。

山岡屋才助は、行燈あんどんをよせて、

『ム……。こいつあたしかに、坊主の鉄雲てつうんの筆てだ。あの偽にせ和尚

も、ずいぶん悪事をかさねたから、もう年貢ねんぐにかかってもいい頃
だろう』

『ですが、残念がつて居りますよ。折角せっかく、一生一度の大仕事を
やった所で、縄になつちやあ何にもならないと云つて』

『此の手紙には、詳しい事は、使つかいの口から聞いてくれとあるだけ
だが、先刻さつきは、藪から棒の話なので、半信半疑に聞いていたのだ
が、一体、小判で七百両の金を、何うしたつて云うのか。もう一
遍、よく飲み込めるように話してくれないか』

『へい、その使に來たんですから、何遍でも話します。——実は、
和尚鉄が、これを打ち明けて、あなたに頼むのも、何うやら今度
は御処刑おしおきも獄門ごくもんと極りそうなんで』

『ム、軽くてもまあ、その辺だろうな』

『するともう二度と、この娑婆しやばにやあ戻れません。——そこで折角の七百両を、あの儘にして置いて置いちゃどうも、死ぬにも気にかか
るし、同じ誰かに取られるなら、他人に渡すのは業腹ごうはらだから、
山岡屋さんの手に揚あげて貰もらって、石塔せきとうの一つも建たって貰もらえれば
有難ありがたいし、運うよく、遠島えんとうとでもななって、娑婆の風かぜにふかれる日
がああつたら、そのうちの幾分いくぶんでも、助たすけて貰もらえれば嬉しいと——
——こうまあ当人が云いうわけなんでござごいます』

『よく分わつたが——其処そこでその七百両の金を沈しずめてあるという場
所ところは？』

『永代橋えいたいばしの西河岸にしがしで、橋たもとの袂たもとから川下流しものほうへ、足数あしかずにして

十五、六歩ほど歩いた所の川の中だそうで。——あの辺にや、杭くいが多うございますが、その杭よりも外側へ投げこんだと云いました
たが』

『金はバラでだろうか？』

『いいえ、七百両みんな封金で、そいつを、餅網もちあみに入れて口を縛つてあるとの事ですから、川の水が増しても、流れて場所の変わる気づかいはございませぬ』

『餅網とは、うまい物へ入れたものだな』

『中洲なかつすの米屋の隠居所へ押込に入つて、それだけの金を盗つたはいいが、重いので持つにも困つて、女中部屋から餅網を見つけ、そいつへ金を入れて、悠々と担かついで来る所を、女おんな橋なはしの辻番小

屋から六尺に尾行つげられたので、まだ、逃げきれぬつもりだったんでしよう。その金を、河岸から川の中へ抛ほうり込んで、一目散いちもくさんに逃げ出したらしいんです。——所が、黒江くろえの辻まで来ると、運わるく、町見廻りの旦那衆にぶつかってしまったので、前と後うしろの両方から挟はさみ撃うちを食くつて、さしもの和尚鉄も縛くくり上げられてしまつたわけでき』

『白洲で、金の事は申し上げてしまわなかつたのかなあ』

『出鱈目でたらめを云い通したんでしよう。お上でも分しまらず仕舞しまい、米屋の隠居所でも、泣き寝入りとなつています』

『じゃあ、和尚の鉄雲は、その川の中の金を俺おれに引揚ひきあげてくれ——とこう云うのだな。おれに譲ゆずるといふんだな』

『……で、誠に何ですが、その、私も首を賭けて、こういう危い使いに來たのでございますから、そこをお酌くみ下すつて、幾分かの所を山岡屋の手から頒わけてもらえと、和尚鉄も申しましたので』

『そいつあ分っているよ。だが、嘘じやアあるまいが、一応、ほんとに川底に、金が有るか何うかを、確めた上でなくつちや、お前さんにも礼はやれないぜ』

『元より、只今すぐには申しません。いずれ又、改めて、夜分でも、お店のほうへ上る事にいたしますから——』

牢番といえ、伝馬者のうちでも、ひどい薄給と極っていた。さだめし、女房子をかかえて苦しい生活をしているのであろう。いかにもいじけた——おどおど恟々した眼で、密談がすむと、すぐ起つ

て、障子しょうじを開けた。

『……あつ。』

と、吃驚びっくりしたような声をもらして、喜多川春作は、梯子段はしごだんの中途からあわてて、階下したへ影をかくした。

『——誰だ、立ち聞きしていやがったのは』

山岡屋が、そこから覗き下ろした時は、勿論、誰もいなかった。梯子段の下で、牢番の男が、

『じゃあ御免なさいまし。……お邪魔をいたしました』

と、傴僂せむしのような背中を見せて、挨拶していた。

『誰か知らぬが、虫のすかねえ奴がいる。人の密談を盗み聞きなどしやがって……油断も隙もなりやしねえ』

行燈あんどんの下においてある煙草入を取つて、ぽんと筒を鳴らし、梯子段を下りかけようとする、襖ふすまの閉まつている次の暗い部屋で、

『ムーツ……。ああよく寝た』

ふいに誰か、不遠慮な欠伸あくびをしていた。

四

山岡屋は、恟ぎよつとして、足を竦すくめた。

まるで、天から授さずかり物のような今夜の使の話なのである。有う卦けに入るといふのはこんなことだろうと独りで悦に入っていたの

だ。

所が、もう梯子段で、誰か、盗み聞きしていた奴がある。それにさえ、しまったと思つていると、この二階には、まだ他に寝ていた人間があつたのだ。

最初から、こういう話と知つていたなら、充分に注意をするのだったし、雨などは厭いとわず戸外そとへも出たのにと、今になって、後悔悔された。

『……いけねえ、煙草たばこ盆ぼんの火が消えていやがる、おい、誰かそ

こにいるらしいが、行燈の火を、ちよつとここへ貸してくれ』

襖ふすまの中からそんな声こゑがした。——山岡屋やまおかが開けてみると、丹たんぜ

前まへを被かつて、腹はら這はいになつていゝる男おとこが寝ね呆ぼけ眼まなこをあげ、

『おう、山岡屋か』

と、銀歯を見せて笑った。

あざみ

あだな

薊と綽名のある遊び人の芳五郎だった。——悪い奴に、と山

岡屋は眉をひそめて、

『煙草の火なら、贅ぜいたく沢を云わずに起きて来たらどうだ』

『そうさなあ。……もう朝か』

『馬鹿を云え。夜半よなかだ』

『夜半に、何の客だ、今帰けえつたなあ』

『薊あざみ』

『む？ ……』

と、行燈の燈とうしん芯へ雁首がんくびを入れて、

『——いやに怖い顔をするじゃあねえか。何だい？』

『おめえは、今の話を、聞いていたな』

『そう云われて思い出した。——夢かと思っていたが、じゃあ今

ここで、密々ひそひそ云っていた二人の話はあれあほんとの事か』

『それよりも、おめえは一体何だつて、こんな所に寝ていたんだ』

『大きなお世話だろうぜ。おれはここのお可久まぶの情夫だもの』

『ふうム……そうか』

『——と、まあ自分だけで己惚うぬぼれているのさ。だが、今の話を聞

いたからつて、こいつあ何も俺が盗み聞きしたわけじゃねえ。お

めえの方から、俺の枕まくらもと元へやつて来て、勝手に喋しゃべりちらし

たんだから、此先このさきとも、何う事が成り行こうと、俺の罪じゃね

えぜ。それだけは断っておくよ』

薊の銀歯はセセラ笑いながら、暗に何ものかを挑戦していた。男ぶりから云つても、悪事の腕にかけても、山岡屋の才助は、一歩の負け目をこの男には感じずに居られない。

凝と——顔いろを読んでいたが、折れて、

『兄^{あにき}哥。……何もそう俺は尖^{とが}つてゐるんじゃないやねえ。おめえの枕元

で、あんな話をしたというのも、これや矢張^{やっば}り、おめえにも運^{のり}があつたと云うもんだ、どうだ。この仕事は、乗^{のり}で行こうじゃねえ

か』

薊^{あざみ}は、うすい笑をのぼせて、あつさりど、首を振った。

『いけねえ。そいつア断る』

『なんだと』

『山岡屋、てめえ、煙管きせるを斜しやにつかんで、何うする気だ。——七百両を乗のりでゆけば、取り分は半分になる。勿体ねえから嫌だというんだ。おらあ一人であるの金を揚あげるんだから』

『ふ、ふざけた事をいうな』

『何を息いきり立つすじがあるか。てめえの金じやあるめえし……』

『ようし！ ……。おれも山岡屋だ。取れるものなら取ってみろ』

『一割もくれというなら、手伝わせてもやろうが、さもなければ、あなほち虻蜂とらずになるぜ。はははは、どれ、階下したへ行つて、面つらでも洗おうか』

二階の荒っぽい話し声を、階下したでも変に感じたのであろう。玄

庵もかまきりも、碁をやめて、天井を仰いでいた。

だが、そこへ下りて来た薊と山岡屋は、もう何も気色ばんだ顔いろはしていなかった。

『よう、又夜明かしか』

薊は、にやにや云うし、山岡屋は

『おや、春作さんは、もう帰ったんですか』

と、見廻して坐りこんだ。

その春作は、風呂ふろから上ったお可久と、台所部屋の隅で、何かヒソヒソ話していたが、やがてそつと傘を借りて帰って行った。

波紋魚紋

一

『——嘘かな？』

山岡屋は、小舟の縁へりから、落ちこみそうに、川の中を覗き込んでいた。

独りで漕こいで来た貸船を、永代橋から少し下流しもの所を約二十間ほどの間、あっち此こち方ちこ漕こぎ廻まわって、

『はてな、たしかに、この辺だと云ったが？』

朝の空があまり晴れているので、雲が水面に映って見にくいのである。けれど水はよく澄んでいた、白い瀬戸物の破片かけらだの、俵だの、傘の骨などはよく見える。

『も少し、真ん中のほうかしら』

考えてみると、河床かわどこは、河心かしんへ向つて、だんだんに深くなつているので、雨ふり揚句あげくの水みず嵩かさが増した時などには、其の方へだんだん移動してゆくのが自然だった。

棹さおを入れてみると、だいぶ深い。彼は、夢中になつて、突つ立てては船を移した。底の沼ぬまつち土ちが、むらむらと浮いて、水はいちめんに暗くなる。然し、流れが早いので、又すぐに澄み返つた。

『……あつ、あつた』

棹は水面へ抛つてしまった。そう深くも見えない所だ。青々と水が渦を描いている。両手を眼にかざして覗きこむと、雑魚の影さえ透いて見えるではないか。

封金の封紙が洗い流されてしまっているので、黴しい山吹色の黄金が、素裸で水に研がれているのだった。

『ウーム、成程、網袋に詰っている』

いくら見ても見飽かない山岡屋の顔つきだった。今にも、

何とかして引き揚げてしまいたいが、対岸に、船番所のある事、河岸をゆく往来の者が、ともすると立ち止まること、物売り船や荷足船が絶えず上下しているので、すぐ感付かれてしまいそうな

事——

『……駄目だ、昼間は』

勿論、昼間行動できない事は考えていたので、用意の為、袂に入れて来た白い碁石を、彼は、金の沈んでいる附近へ、夜の目印の為、ザラザラと船べりから撒まいた。

そして、何食わぬ顔して、永代橋の下を漕こぎ戻つてくると、

『山岡屋、山岡屋』

欄干の上から呼ぶ者がある。

ハツと、彼は、薊の顔を思い出した。だが、橋を片手に、仰向いてみると、それは芳五郎ではなくて思いがけない外科医の玄庵だった。

『お、先生ですか、どちらへ』

『おまえこそ、何をしているんだ。だいぶ熱心らしいが』

『——お天氣がよいので、きざん氣散じに、ざこ雑魚でも釣ろうと思ひま
してね』

『うそを云え、雑魚ではあるまい』

『えっ』

『聞いたぞ』

『だ、だれに』

『まあいい』

『先生つ、ちよつと、話がありますから、待っておくんなさい』

あわてて、船を岸へ寄せ、山岡屋は陸へおか飛び上つてみたが、もう玄庵のすがたは、橋の上に見えなかつた。

二

ふしぎな現象である。急に、お可久の碁会所へ、常連の寄りが悪くなった。

もつとも、来る事は、相変らず朝となく夜となく来るが、顔が合つても、誰も、碁を打たなくなつたのである。一分二分の賭博かかけにも、昂奮が失くなつた様子なのだ。

『はてな？』

かまきりの伝九郎は考えた。

彼だけはまだ何も知らないの、この現象が不審ふしんでならなかつ

た。

『——おかしいぞ。春作が、いやにそわそわしている。玄庵の奴も、来ても、妙に腹に一物もつという風だ。……山岡屋が誰よりも変だし、彼のあするどい薊の眼にも、何かこの頃、思惑おもわくがあるらしい』

頻しきりと、犬のように、人の顔つきを嗅かいでいたが、分らない。お可久に聞いても、笑っているだけなのである。すると、或る夕方。

『伝九郎さん、一杯、交際つきあつてくれませんか』

と、山岡屋が誘う。

どこへ引つ張つてゆくかと思うと、深川の櫓やぐらしたおんなおんな下した妓おんなまで呼

んで、この男にしては、解げしかねる散財だった。

『時に、折入って、頼みがあるが』

と、果して、その晩の帰り途、こう切り出しての話に、

『うまく行ったら、百両やるが、乗らないか』

『途方もない儲け話だが、何だい、それは』

『一人、殺やつてもらいたいのだ』

『人間をか』

『当りまえだろうじゃないか』

『待ってくれ、百両で人ひとり……。相手に依るなあ』

『薊あざだ』

『……えっ、あいつを』

三

書肆ほんやからは頻々ひんぴんと矢の催促をうけるので、版木彫はんぎぼりと刷すりをひき請うけている彫兼ほりかねの親爺おやじはきょうも、絵師の喜多川春作の家へ来て、画室に坐りこんでいた。

『困りましたな。もうこの三月の初めにや、とつくに刷とじも綴とじも出来て、版元へ納まっています筈なんですぜ。——絵が出来ないばかりに、彫にもかかれず、手前どもの職人の手も空あいちまっているんです』

『すまない、今日は描く』

『その今日が、四十日も持ち越されちゃあ』

『きつと、今日いっぱいには』

『お邪魔でも、待たせておいて頂きましょう。もう、手ぶらじゃ
帰れませんから』

『そんな事をいわないで、今日——今夜だけ、待つておくれ。——

——今夜こそ、徹夜てつやをしても、きつと描き上げてみせるから』

『ほんとですか』

『大丈夫』

——だが、彫兼が帰ると、春作は、机に、ぼんやり頼づえをついた儘、半日も、何か考えこんでいた。

(そうだ)

われに返つたように、雁皮紙がんにびへ絵筆を執り出したが、いくら描いても、反古ほごを作るばかりだった。そしてしまいには、無数の女の顔を、徒らいたずらに描き初めた。その女の顔は皆、お可久に似ていた。

『……あの七百両の金が手に入れば』

筆をおくと、そんな事を考えた。恋の為に、金の魅力だった。

然し、彼にはそれを自分の物にするだけの自信がない、勇気がない、悪智がない。

あの事を、耳にした晩、春作はすぐ、台所部屋のすみで、お可久にその秘密を話してみたが、お可久は、大してそれに昂奮もしなかつた。ただ、

『春作が、それを手に入れたら、夫婦いっしょになつてあげてもいいね。

江戸を売って、京都あたりでちんまりと暮してみたい。もう、こんな碁会所なんて懲々こりこりだから——』

そんな事を囁ささやいたきりだった。春作は、幾いくばん晩も幾晩も、永代河岸を歩いてみた。だが、河の中へ入ってゆく気になれなかつた。水が怖いのではなく、世間の眼と世間の灯が、いつも背後うしろで気になつた。

『ああ、わしののような気き怯おれ者は、何をしたつて、生きて行く力が足りない。体は弱いし、絵は上手うまくならないし……。悩むために生きているようなものだ』

ふらふらと引窓ひきまどの下へ行つたのである。夕方の星が、四角な狭い口から白つぽく見えた。春作は、引窓の綱にすがつて、泥へつつ

竈いの上に乗った。

首へ綱をかけ、足を外した。——死んだと思つた途端に、上の横竹が折れたのか、古い綱が切れたのか、春作は、流しの手桶の上へ、ひっくりかえ転つていた。桶の水をかぶつたので、思わず、大きな声を上げたらしい。

『おやつ、何うなさいましたか』

と、隣家となりの女房が、駈けて来て、抱き上げてくれた。

四

ヒあいくち首をつかみ、解けかけた帯の端を左の手で持ちながら、薊あざみ

の芳五郎は、脱兎だつとのように、木場きばの材木置場の隅へ逃げこんで行った。

すぐ、後から追い込んで行つたのは、かまきりの伝九郎だった。青い月が空にある晩で、元よりこの辺は人通りもなかった。

『野郎っ。出て来い』

かまきりは、大刀ひっさを提げて、材木の下を覗いた。

横たわっている材木の枕まくらぎ木の奥に、薊すくは、竦みこんでいた。

『かまきり、何だつて俺を。……何も俺に意趣いしゆも恨みもあるめえに』

『所が、大有りだ。てめえは、お可久を狙っているだろう』

『お可久の事なら、俺は、手をひいてもいい。何も、女早ひでりをし

『いるわけじゃなし』

『いや、何うあつても、てめえ汝の生命は欲しい。出て来い。うぬ、

出て来ねえなら』

刀を突つ込んで、闇を搔かきまわ廻すと、

『待つてくれ、かまきり』

『遺言があるなら、今のうちに云え』

『おめえは、山岡屋に頼まれて、俺を殺してくれと云われたのだ
ろう』

『それが何うした』

『読めた。おめえは、お人好しだ。何も知らねえんだ。騙だまされて
いるのだ』

薊は、材木の奥へ、墓がまのように身を避さけた儘、そこから必死の弁をふるって、山岡屋が和尚鉄の沈めた七百両の金を河から揚げようとしている目企もくろみをすつかり喋しゃべ舌り立てた。

『おめえに、幾らその頒わけ前を出すと云ったのか知らねえが、金なら俺がやろうじゃねえか。二人で組んで、和尚鉄の金を、山分けにしてもいい。お可久へも、おれはもう手を出さねえから、生いのち命だけは助けてくれ』

薊からそう聞いて、かまきりは、初めてこの頃の事態うなずが領けた。そして、百両で自分を操あやつろうとした山岡屋を憎んだ。

『そうか、じゃあ今の話に、嘘はねえな』

『嘘だと疑うなら、これから山岡屋へ行つて、二人で坐りこんで

対決してもいい』

『おもしろくなつた。薊、もう安心して出て来るがいい。実は、山岡屋から殺してくれと頼まれて、てめえ汝に、喧嘩仕掛じかけを吹ツかけたのだが、もうやめて、その代りに、和尚鉄の金には、俺の息もかかつていると思つてくれ。百や二百の頒わけ前じや承知しねえぞ』

『いいとも、生命いのちさえ……。ああ、冗談じゃねえ、あぶなく死神に取ツ憑つかれるところだつた』

『今の話を、もうちつと詳しく聞きてえが』

『いくらでも話すが、おら、もうこんな寂しい所じや』

『大丈夫だつて云うのに、何も好んで人殺しなどはしたくねえ。ただ、その七百両の一件だが』

『蛤鍋屋へでも行つて、飲みながら話すとしよう。こう、襟えりくびが、何時いつまでもぞくぞくしやがつていけねえ』

『口ほどもねえ悪党だ』

『こう見えても、おら、割合に気が小さいせえんだ』

と、着物の土を払いながら、かまきりの背後うしろへ廻ると、不意に、相手の脇腹へ抱きついた。

『わツ！ ……。ち、ち、畜生っ』

かまきりの伝九郎は、全身でもがいた。薊あいくちのヒ首は彼の脾腹ひばらにふかく入った儘離れなかつた。狂う程かまきりは自ら血をしぼつて。その血は、月に青光りして、あたりの鋸屑おがくずに斑々ところぼれた。

白い碁石

一

自分が見廻らない時は、他人ひとを番に立たせておいて、山岡屋は、永代河岸を警戒させていた。

それでも尚、彼は不安であつたとみえ、そこから近い菖蒲河岸あやめがしの団子屋だんごやの二階を借りて、たいがいは其処へ来ていた。

あれから、何度も船を出して、かぎなわ 鈎繩を下ろしてみたり、つぎぎ 繼竿おに引つ掛を付けて、探ってみたりしたが、場所は、あいにく 生憎と
 思いのほかすいしん 水深があつて、そんな楽な手段では揚りそうもなかつた。

医者の玄庵が、しき 頻りと、この辺を徘徊した。永代橋の上から考
 えこんで見ている姿も何度も見た。まだ陸にも川にも往来の少い
 夜明け方小舟で、何かやっている所も、一度や二度ならず、山岡
 屋は見つけた。

さみだれ 五月雨になると、川は殆ど毎日濁つて、水もずっとふ殖えていた。
 当分は手も出せない濁流だった。

山岡屋は、ぶらりと、玄庵の門へ訪ねて来た。

『先生、ひとつ診みて下さいませんか。どうも又、持病のせいか、頭脳あたまが重くて』

と、力のない顔いろをして云った。

『陽気がわるいでの……この入にゆうばい梅では』

玄庵は、すぐ処方してくれた。碁盤を出して、挑いどんだが、山岡屋は、今日は碁もすすまないと云って、

『如何いかでしょう、こんな日には、少し気散かじに、辰巳たつみへでも行つて陽気に騒いでは』

と、外へ誘った。

好むところと云わないばかりに、玄庵は支度にかくれた。そして煎薬せんやくを自分で沸たてて来て、

『これを一杯飲んでゆくがいい。すぐ頭が軽くなるうでと、すすめた。』

山岡屋は、煎薬をのんで待つていたが、いつ迄、玄庵の姿が出て来ないので、

『先生、まだですか』

起ちかける、がくつと、両手をついて、首の根を前へ折るように垂れてしまった。——ご、ご、ご、ご、……とその唇から黒い血を吐いているのである。何か叫ぼうとするらしく畳へ爪を立ててもがいていた。

縁日へ行つたと婆やがいうので、玄庵は、二階で待つていた。
初夏の若葉のにおいがする晩だった。

『婆や、この頃は、山岡屋も、かまきりも、ちつとも顔を見せんのう』

『ほんとに、皆様が、ばツたりなんでございますよ。とてもこれでは、商売にならないというので、私にも、とうとうお暇いとまが出てしまいました』

『ほ。ここを仕舞しまうつて』

『あ……お帰りなさいました』

婆やと入れちがいに、お可久は、縁日で買つて来た葵あおいの鉢いを持

つて上つて来た。

それから、酒が出て、玄庵はおそ晩くまで話しこんでいた。頻りと玄庵は今夜は彼女に返辞を迫った。お可久の返辞次第では、今の高橋の門戸をたたんで、大阪へ出て、家を持つとうというのだった。そして、近いうちに大金が入るから、それをしお機にともつけ加えて云う。

『泊っていらつしやいな……』

お可久のほうからそういった。玄庵は、杯をお措くと横になつてしまった。

——だが翌日になつても、翌々日になつても、玄庵の姿は、この家から出て行かなかつた。

その代りに、薊あざみの姿がチラチラ見えた。婆やは、風呂敷づつみを持って、暇乞いをして自分の家へ退さがって行つた。——翌晩、薊は、お可久にも手伝わせて、畳を上げて床下を掘っていた。血みどろになつた玄庵の死体が、蒲団ぐるみ、土の下にかくされた。蠟燭ろうそくの白い斑点も、畳の下の秘密となつた。

碁会所だつたその小門に、やがて、貸家札が貼られた。——それから数日の後である。もう夏めいた月の冴えであつた。

大川は、しいんとしていた。水は、透きとおっていた。

旅すがたをした男女が、永代橋の上に立つた。

『だいじよぶかえ、芳さん』

お可久が川をのぞいていうと、薊は、自信のある声でいった。

『おれの生れ在所は、天竜川のふちだ。天竜川からみれやあ、こんな川は、まるで泉せんすい水みてえなものだ。泳ぎにかけちや、こう見えても、己惚うぬぼれじゃねえが、夏場よくこの河岸筋かすじで師範している何とか流の先生にも負けひはとらねえつもりだが』

『おや？ ……。春作だよ』

『何、春作。 ……春作が何処へ来たつて』

『叱っ』

お可久は、男の袂たもとをひいて、知らぬ振を装おいながら、橋の欄干の外へ顔を出していた。

ひよいと、振向くと、成程、喜多川春作が来るのだった。その春作の拳動も、此つ方を憚っているらしく思われる。橋を越えて

も、頻りと、河岸ぶちを行ったり来たりしている。

あざみ 薊は、近づいて行つた。いきなり声をかけると、非常に驚いた

様子で、春作は逃げかけた。跳びかかつて、薊は、彼の両手を縛り上げた。

『何しに来やがった。てめえ 汝なんぞが、野心を起したつて、無駄なこつた』

『わ、わたしは何も、決して……。そ、そんな大それた野心を持つて居るんじゃない。ただ……。』

『ただ？ ……何だ』

『お可久さんに、一言、話をしたいと思つて、あなた方が今夜、花屋を出る所からお後を慕つて来たんです』

『何だと、俺たちを尾^つ行て来たつて。……はははは、呆れけえつた男だ、おれとお可久と、こうして仲よく旅立つ姿を見ても、腹も立たずに、指を唾^{くわ}えて、後から見ていたのか』

『私は、一^{ひと}言、お可久さんに最後の事を云いたかつたんです。それで、諦めるつもりだつたんです』

『こいつにやあ、刃物を出す気にもなれねえ。お可久、おれが川から金を揚げてくる間、何とか一言云つてやんねえ、生霊が取^つ憑くといけねえや』

『いやだよ。私は……』

『罪ほろぼしと思つてよ』

薊は、春作の体を、橋の欄へくくりつけて、そこへ、自分の帯

を解き初めた。

脚きやはん絆わらじは元より、着物をすべて脱ぎ捨てる。そして、腹巻一つの真つ裸になると、魚のように、身をひるが翻えして、川の中へ躍り込んだ。

三

大きな波紋の下に、薊のすがたは暫く沈んでいた。

天竜川育ちと、自分でも豪語ごうごしていたが、彼の水の中の動作は鮮やかであった。

水深の底の底まで、月明りが届いていた。そこらにこぼれてい

る白い碁が数えられる位なのだ。薊は幾度も身を逆しまにして、そこに眠っている黄金の網の袋へ、手をのばした。

何十回目かで、彼は、遂につかんだ。

『七百両』

と、水の中で彼の心臓はさげんだ。

だが——それを確乎しっかと抱え込むと、今度は、体が彼の思うように浮かなかつた。金が、何尺か河底かていの沼土を離れたと思うと、再び、体のほうが、金の力に持つてゆかれて、ぶくぶくと底へ引き込まれる。

『七百両だ』

そればかりを、薊は思っていた。水は、真つ黒に濁つて、彼を

つつんだが、彼は掴つかんでいる物を死力をもつて掴つかんでいた。

四

夜明が近くなる——

半刻はんとき、一刻と経たつても、薊は浮いて来なかつた。

遂に、二刻も経たつた。

『死んじやつたのか知ら？』

お可久は、ぞつとした。青い青い水面のさざ波は、魔の淵ふちを思
わせた。

『——お可久さん、お可久さん、後生です、この繩を解いて下さ

い。そして、私はもう諦めているんだけど、町画師の春作というしがない男が、昔、江戸の裏町の隅ッこで、凝じつと、お前さんを想いつづけていたという事だけを覚えておくんなさいね。…それだけだ私が、云いたかった事は』

『春作さん！』

お可久は、彼の縄を解いて、そして、手頸を引つ張るようにして叫んだ。

『おまえと暮しましょう。他国へ行つて』

——だが、その時、永代橋を踏み鳴らして、ここへ一瞬に駈けつけて来た町方と捕手は、逃げかけるお可久を追いつめて、

『おふさ！
もうてめえ汝のかめん仮面はきかねえぞ』

と、高手小手に縛^{から}めてしまった。

その人々の騒^{ざわざわ}々と云っている言葉を綜合してみると、お可久という名も、大名のお部屋様だったなどという事もみんな嘘で、ほんとは、日光山の中院の僧の隠し子で、土地の宿屋の娘という事になっていたが、性来の毒婦^{どくふがた}型の女で、家を飛び出してからは上方は勿論、長崎から諸国を流れあるいて、行く先々で、豪華な悪の生活をしていたという札^{ふだ}付きの女であるらしかった。

春作は、裸^{はだし}足のまま、本所の家まで走って帰った。生きている顔いろもなかった。

戸を閉めきつた儘、彼は、二日も外へ顔を出さなかった。けれど、彫^{ほり}兼^{かね}のおやじが、その日も又、催促に来て、外から戸をた

たいた。

『あ、描けているよ』

春作は、ふた晩も寝ていない眼をして、十数枚の画稿がこうを、すぐそこへ持って来て渡した。

『え、ほんとですかい？』

と、彫兼すら眼をみはって疑った。

(昭和十一年三月)

青空文庫情報

底本：「吉川英治全集・43 新・水滸傳（二）」講談社
1967（昭和42）年6月20日第1刷発行

初出：「富士 臨時増刊号」

1936（昭和11）年4月

※初出時の表題は「魔金」です。

入力：川山隆

校正：門田裕志

2013年10月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

魚紋

吉川英治

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>